

文化人類学者の奥野克巳さん(右から2人目)とともに、人類学と仏教学それぞれの視点から人間の在り方について論じたシンポジウム＝昨年12月、京都市左京区・京都大



人類学×仏教学 その先に見えるものは

人類学と仏教学という異なる視点を交差させると、いったい何が現れてくるのか。人文学の新しい可能性を探るシンポジウム「仏教と人類学のまじわるころ」が昨年12月、京都市左京区の京都大でシンポ

京大でシンポ

大で開催された。「はじめの人類学」などの著作で知られる文化人類学者の奥野克巳・立教大教授が講演し、京都の仏教学者らと議論を交わした。

奥野さんは講演で、「構造主義」と言われる思想潮流を形作った人類学者のクロード

レヴィ＝ストロースの思想、縁起や無我論…

学問の接点、人間の存在考察

・レヴィ＝ストロースの仕事を紹介。「レヴィ＝ストロースは私たちの暮らす社会、文化の背後には目に見えない無意識の構造が潜んでいると述べた」と説明した。さらにロジェ・カイヨフやジャン・ポール・サルトルらフランス知識人との論争をたどりながら「人間を、歴史をつくる主体とみなす当時の主流に対して、まったく新しい人間観を提示した」と解説し、人間に意識されない隠れた秩序の存在を強調した。

さらに構造という概念は人間の計らいを超えたものだと「そこから仏教につながる」と指摘した。例として親鸞の説いた「自然法爾」は「大きな力によって人間が生かされているとする教え」だと説明。構造主義との響き合いを示した。そのほか、ティム・インゴルドなど現代の人類学者の思想にも触れ、仏教における「縁起」とのつながりを示唆した。

奥野さんの講演が終わると、花園大教授の師茂樹さん(仏教学)らが議論に参加。主体の存在を否定的に捉える仏教の無我論とレヴィ＝ストロースの思想を比較した。縁起についても言及し「レヴィ＝ストロースに引きつけて言えば、『構造』と言ってもいいかもしれない」

と考察。人類学と仏教学の視点から、多角的に人間という存在について議論を交わした。同シンポジウムは、京都大人と社会の未来研究院の小西賢吾特定准教授(文化人類学)と亀山隆彦研究員(仏教学・日本思想史)が運営する「身体と社会の実践知研究会」が主催した。昨年10月から定期的に一般向けの研究会などを開いており、今年20日にもシンポジウム「お寺×薫り×サイエンス」を左京区の京都大稲盛財団記念館で開催する。寺院でたかれるお香などをめぐるサイエンスをテーマとする。詳細は京都大人と社会の未来研究院のホームページから。

(広瀬一隆)